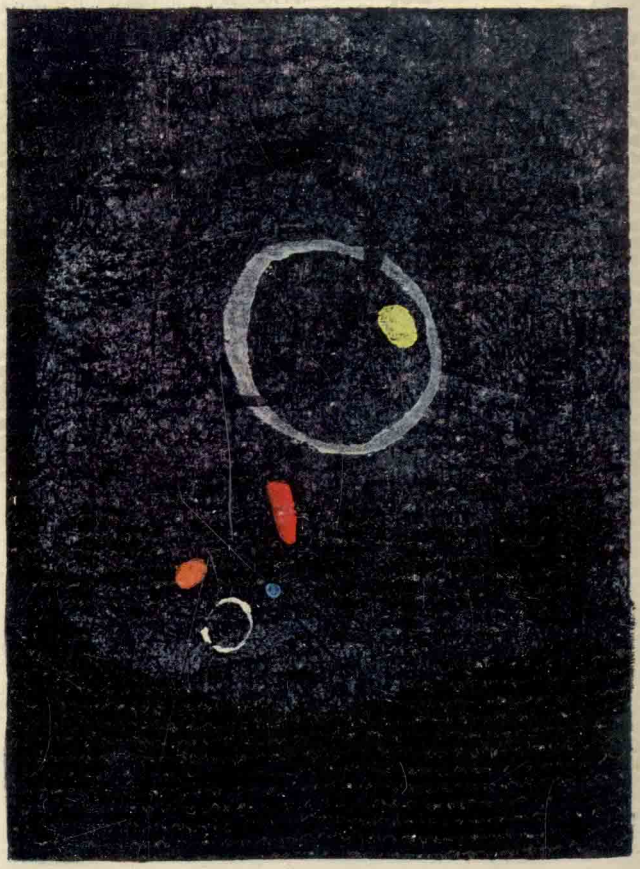
無明長夜

吉田知子



新潮社版

無明長夜

吉田知子

新潮社版

無明長夜

昭和四十五年九月十五日　発行
昭和五十年　二　月二十日　九刷

定価八〇〇円

著者　吉田知子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
業務部（〇三）二六六一五一一一
編集部（〇三）二六六一五四一一
振替東京四一八〇八番

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします）

印刷　株式会社光邦　製本　大口製本株式会社
© 1970, Tomoko Yoshida, Printed in Japan

《目次》

寓話 5
豊原 31
海へ 63
静かな夏 77
終りのない夜 95
歯 137
無明長夜 167
後記 250

装幀　萩原英雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

吉田知子作品集・無明長夜

寓

話

桑木石道は数多くの狂信的な崇拝者を持つ有名な書家である。書家というよりは、むしろ画家だという人もある。石道の書は殆どが字の形をしていない単純な直線で構成されているからである。その書風と同時に彼の奇人ぶりも夙に広く人々の間に知れ渡っている。

最近、石道は崇拝者の一人から古い家を提供されて居をかえた。百何十年もの年月を経ている、だだっ広い武家屋敷である。西北隅の部屋などは、もう朽ちかけて足を踏みいれることもできなかった。持主は、石道の希望通りに手をいれると言ったが、石道は「そのままがいい」と断わった。庭は家の大きさに較べると狭いといってもよかった。三百坪にもならない。石道は、その庭に突きでている茶室風の八畳を書斎に決めた。四、五日は書も書かずに広縁ごしに終日、庭を眺めた。

庭には昔から近在の百姓たちの目標となっていて、ずっと遠くからでもそれと解る群をぬいて丈高い松の木が二本ある。その他にも並より遙かに太く逞しい椎、楓、楠、樫、櫟、楢、杉などの巨木が自然のままの伸びほうだいの枝を拡げている。その堆い落葉の下に僅かに築山や泉水らしい起伏が残っていた。石道の妻の祐子は引越し荷物の整理が一段落つくと早速、庭師をいれた。

田舎のことで隣町から応援を頼み、まだ十六、七の見習いまでいれて、やっと三人の庭師が揃った。しかし一日目は下草を少し刈っただけだった。聞き上手の祐子の相槌にのって一時期、一人きりでここに住んでいた変人の老医師の話をしたり、町のまんなかにあるこの邸のために町の西側が発展しないと非難めいたことを喋っただけで帰った。それでも四、五日、三人がかかりきりになると庭は目に見えて小ざっぱりしてきた。それまで何も言わなかった石道が急に祐子にいいつけて庭の手入れを中止させたのは八日目である。何の理由とも言われないのだから、勿論、庭師たちは納得しなかった。油ののってきた頃で、祐子と庭の形の相談をする声高な、はりきった声が日に何回も聞えていたのである。祐子は下手に出て倍の日当をはずみ、何度も頭をさげた。「また頼む、と言われても、もう、わし達は知りませんでね」と中年の眼のくぼんだ庭師は捨てぜりふを残して肩を張って帰った。

その日は四人の客があった。石道会の会員たちである。石道が祐子に「庭をいじるのは、もうよい」と言ったのは祐子が昼食を運んできた時である。庭師が入っているのは毎日だし、その間に客も何人か来たが、今までは何の文句もつけなかったのだ。だが、祐子の方も石道の唐突な命令には馴れているから、ただうなずいただけである。聞いても、それ以上何も言わないことはわかっているので問いかえしもしない。

祐子がさがり、庭師が帰ってからも石道は運ばれてきた膳に手をつけなかった。朝から石像のように、じっと黙って坐ったきりの客たちもしかたなく空腹を我慢した。二、三時間たって陽がだいぶ傾いてくると、鳥が二、三羽乾いた羽音をたてて櫟の繁みに止った。すると石道は「うむ」と大きくうなずいて、ごろりと横になった。客の多くは庭を眺めていたが、無理に平然とした

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ようすで箸を割り始める男もある。しばらくして石道は無造作に起きあがり、すっかり冷えきった清汁をすすり始める。口の中で噛みながら「いつでも人工というものは」と独り言のように言う。客の中年男たちは、ぎごちない手つきで魚をつつきながら石道の口許を見ている。「未完成なものだ」と石道は口の中で続ける。その途端に客たちは大げさなさまざまの反応を見せる。感嘆の吐息を洩らすもの、頭を幾度もさげるもの、考えこんでしまうもの。よく聞きとれなかったものも感極まったような顔をして口の中で何か呟いている。石道の客のもてなし方はおおむねそんなふうで、朝から晩までいても一言も石道の言葉を聞かないことも、そう珍しいことではなかった。客がおそるおそる何か聞いても答えることは滅多にない。

石道が祐子を家にいれたのは四年前である。どういういきさつで石道より三十近くも年下の、まだ二十代にさえみえる祐子が石道の所へ来るようになったのか誰も知らない。祐子が、どんな家の出なのか、それまでに何かしていたのか、というようなことも何もわからない。八重歯のめだつ、まるまると肥った背の低い女で笑い顔にも動作にも愛嬌が溢れている。痩せて背が高く、いかつい顔だちの上に、更に苦虫を噛み潰したような顔をほとんどくずしたことのない石道とは対照的であった。

しかし、その石道も昔からそうだったわけではなくて、もう三十年近くもいる女中の浜が彼の所へ来たばかりの頃には驚くほどの大声で笑ったそうである。ちょうど親子ほど年のちがう浜と祐子はよく気があい、浜は祐子を相手に何時間も祐子の知らない石道のことを話したり自分の身の上話をしたりした。若くても浜よりはずっと人あしらいのうまい祐子が初めから浜をたてて呼び捨てにもしなかったので、もともと好悪が激しくて偏窟なところのある浜もすぐに祐子にうち

とけたのである。浜は時には石道の妻である祐子に「こんな年のちがう変り者のところは早く出た方がいい」などとも言った。祐子は「あなたのように親身に言ってくれる人は生れて初めてだ」と眼に涙を浮べてみせたが、決して自分の身の上話はしなかった。

石道ファンで組織されている石道会は年々少しずつ数が殖えて、もう百人に近かった。特別な行事も何もなくて、石道の近況を知らせる印刷物が年に数回くるぐらいのものだが会員には金持の実業家が多く、何もないのを却って自慢にしていた。その会員や、美術、書道関係の客、会員外の愛好家や崇拝者も来て客のない日は稀だった。石道は決して客を拒まなかったが、客と話すこともないし、それどころか庭につきでた書斎から出てこないこともあった。従って客たちが石道を訪問することは何の意味もないように見えたが彼らは結構満足して帰った。用のある客は浜に用件を告げて浜から諾否の返事を貰った。不便な田舎町に越しても客の数は変らず、たださえ広い家の中は女二人では、とても手がまわらない。しかも浜も祐子も揃って掃除嫌いであったから、やむなく毎日掃除するのは石道の書斎に居間と夫婦の寝室、それに来客の出入りする内玄関だけだった。暗い広い台所や、その続きの板敷きや浜のいる部屋などは散らかりほうだいで、ひどい時には文字通り足の踏み場もなかった。石道は家の北側になる裏の方へは来ないから、そういうことも知らないが、もし知っても何も言わないだろう。石道はもう二十年も前、四十をこした頃から口を開けて笑わなくなったし、浜にも用の他は口をきくこともなく怒ったことなどは尚更なかったからである。五十歳頃から彼の書は画家たちに強い関心を持たれ、彼らの間に石道の名を口にするものが多くなった。そこで石道は書道界ばかりでなく一般の美術ファンたちの間でも有名になった。それにつれて彼は次第に寡黙になった。アメリカやヨーロッパの前衛的な芸術

家たちが彼の書をほしがり、雑誌社や出版社からの手紙が毎日のようにくるようになると、とうとう返事もしなくなったのである。今はもう石道会員たちは、ただのファンというよりは崇拝者といったほうがよくなり、彼らのぎょうぎょうしい畏敬ぶりから石道教などと言われながら近頃の彼の書は、ますます単純になって一本の線から遂に点になってしまっていた。彼がどんな会にも属さず、どんな書画商とも契約を結ばなかったのが今となっては都合よく、多くは書かないので彼の書の価値は天井知らずに高くなっていった。また、そうなると、手に入り難くて値段が高いということのために更に彼の作品は全部芸術的傑作として通用した。

古い大きな家に移って間もなく彼は若い批評家に制作しているところを見学させた。批評家は美術雑誌の依頼で来たのである。それまでは彼は石道の作品を見たこともなかった。西欧美術の心酔者だった若い批評家にはどんな返事もしない石道の態度は不可解に思われた。聞えないのではない。顔貌は、はっきりとこちらへ向けられている。顔全体で射すくめられている感じがした。批評家は質問を止めた。石道は紙をひろげた。大きな紙ではない。書く用意がすべてととのっても石道は筆をおろさなかった。呼吸しているとも思えない不動の姿勢で白い紙をみつめている。三十分たっても一時間たっても何の音も聞えない。その気力張りつめている時間の永さと、いざ書くときの気合のこもった低い唸り声に若い批評家はすっかり圧倒された。その後、たった一つの点を書くのに精根をしぼり尽した石道がまるで虚脱したように、うつろな表情になったのを見て若い批評家は一遍に石道教の信者になってしまった。そして、その批評家の書いた「私は神を見た——桑木石道論」は当然のことながら狂熱的なほどの情熱と迫力に満ちていたのである。彼は、もうそれまでに若手随一の実力と説得力のある批評家だと誰にも思われている人であったか

ら、そのすぐれた論文は大評判になり、石道はまた新たに多数の知識人の崇拝者を得た。綜合誌までが石道特集をやった。石道がわからないということは、その人間が精神生活を持たないということであった。記者たちは、石道自身の口からは何も聞けないのでしかたなく作品や浜たちの話から、おおぎょうで独断的な形容詞を連ねた。彼の略歴や日常も紹介され石道の応対ぶりや性癖は、書などには何の関心もない人まで知っていた。彼に興味を持つほどの人なら彼が弟子をとらないということも周知のはずであった。それでも年に数人は入門志願者が来る。それを承知で来る志願者たちは玄関先での祐子の丁寧な断わりだけでは容易に踵を返しはしなかったが中へ通って石道に会い、何を頼んでも聞いても一言の返答も貰えず何時間でも微動もせずに凝視されていると、いくら覚悟の上でも半日で退散した。最近の石道はどうやらそういう無言の行を楽しんでいるらしい節がないでもなかった。一番古い崇拝者である土木業者とはよく昔話をしたものだったが、この頃は必要なことにもろくに返事もしないと土木業者は浜や祐子にこぼした。彼は石道が有名になる前からの知り合いであり、ずいぶん有形無形の援助を続けてきているのである。しかもこの十何年かは家業は息子に任せきりで、石道のいわばマネージャーのようなこともしてい、石道の書を買いたいものはその土木業者の家の方へ来ることになっている。で、その方の話もあるのだが石道は彼の前でも例の無表情な反応のない顔をくずさず、何も声をださない時の方が多くなっていた。すべてに、まるで無関心なのかそれとも意地悪く相手の困惑を待っているのか、土木業者は後者だろうと言っていた。若い頃の石道のたちの悪い冗談の為に土木業者は何度も本気でおこったことがあった。「ああなってしまえば何したって立派にみえまさあね」と土木業者は祐子や浜に言った。彼にいわせると弟子入りを希望してくる若い男たちは石道の絶好の鴨

であった。彼らは石道のことを充分知っていて来るにも拘らず、二時間もすると辛抱できなくなる。それどころか遂に泣きだしてしまった学生もいた。それでも石道は何も言わず、様子を見にいった浜は石道のまばたきが始まっているから大変な上機嫌の証拠だと土木業者に同意した。たしかに、多田と名のるいかにも町の不良に似つかわしい軽薄な感じの若い男が入門を希望してきた時、石道は決して不機嫌ではなかった。

多田は何の反応も示さない石道に向って一人で喋った。自分が二十五歳であること、石道のことを或る雑誌で読んで弟子入りしようと思ったこと、ただ傍へ置いて貰うだけで迷惑はかけないつもりだということなどを。今までにきた男たちは皆、緊張のあまり身を固くしてうつむいてばかりいたが多田はそうではなかった。言葉づかいも、ぞんざいになったり、なれなれしくなったりし、そればかりか石道の仕事さえよくは知らないらしく書の話などは一言もでない。そのかわりに精神とか尽忠などという聞き馴れない言葉が頻出して、次第に石道に修養講話でもしているような演説口調になった。脈絡もなく勝手に弁じたあげく突然、自分は実は右翼の幹部で現在警察に追われているのだが、或る筋から先生が右翼の秘密の重要ポストについておられると聞いたので、ひとつしっかりしこんで貰おうと思って修業に来たのだ、と言いだした。さすがに石道も驚いた顔をして眼玉を動かした。男は石道に頼んだり聞いたりもするが返事をするひまも与えずにまた自分のことを話しだすので石道の沈黙に気づかない。いつも一方的に話す癖の男らしく、石道が何も言わないのを承知だと決めて笑顔になり目配せして言った。「そんなわけで、疲れてるんですよ。ちょっと寝させて貰っていいですかね。いえ、ここで結構。では失礼」言いながら、もう大きな座敷机の向うで横になっていた。石道は思わず立ち上って十分ほど男の寝姿を見てい

たが、本当に眠ったのかどうか、男はみごとにいびきをかきだした。石道はいまいましげな顔で居間をでた。相手が寝てしまったのではどうしようもない。祐子と浜に珍しく荒い語調で、あの男を追いだすようにといいつけて書斎へ入った。

それから二、三日後、この家へ移ったとき、既にもう腐ってとれかかっていた便所のひさしがきれいにつけかえられ、内玄関の大きな沓脱石の下の片端を野良犬がさんざん掘って石が不安定にぐらりと傾いていたのが直っていた。書斎にいる石道がふと気づくと錆びた雨どいをつけかえている男がいる。男は書斎の石道には見向きもせず、梯子をのぼったりおりたりして仔細に水の流れ口を調べている。確かに追いださせたはずの多田である。石道はかっとなって居間へ行き祐子と浜を呼んだ。多田はあの日、祐子に言われておとなしく帰りかけたが、ふと沓脱石に気づいて熱心に直し始めた。直してしまうと「他にもあったら、ついでですから」と愛想よく言い、次次に家のそういう修理箇所をみつけたのだという。人をいれて直させればすぐ済むところを浜も祐子も口にはしながらも、なかなか人を頼むところまでいかなかったのだが、気にしだすと古い家だけに早急に手を入れなければならない所はいくらでもあったのである。石道は、それを聞いてしまわないうちに、とにかくあの男を早く出すようにといらいらしながら言った。しかし、常には石道に従順というほどではなくても表だって抗ったことのなかった浜が強硬に反対した。あんなに役に立つ人はない、と言うのである。性質も気さくでさっぱりしているし、やはり男手がないと、こんな大きな家では不用心だし不便だと執拗に言い張った。祐子は黙っていたので石道と浜の二人で何回か言いあったが、石道は浜が何といってもきかないので許すともどちらとも言わずに自分の部屋へ引揚げた。多田が特に嫌いというわけではなく、むしろ浜がそんなに自分

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com